様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25　年　5　月　29　日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010～2012
課題番号：22700249
研究課題名（和文）多様な資料の活用に対する教諭の認識に関する研究：モロッコでのアクション・リサーチ
研究課題名（英文）Teachers' Perceptions about use of a multiple of resources: Action Research in Morocco
研究代表者
中村　百合子（NAKAMURA YURIKO）
立教大学・文学部・准教授
研究者番号：80411057

研究成果の概要(和文):本研究では、モロッコ王国およびインドネシア共和国の教師と生徒の、学習と教授における多様な資料の活用と学校図書館の充実についての認識を検討した。モロッコ王国では、東部の町ウジダ、南部の町エルラシディアで、現地の教育行政担当者、小学校教師らに対してインタビュー調査を行った。また、インドネシア共和国のジャワ島のイスラーム寄宿学校２校の女性見習い教師と女子高校生に調査に協力してもらい、約１年間のアクション・リサーチを実施した。これらの調査で入手したデータに基づき、開発途上国の学校図書館開発援助に関するモデルの構築を進めた。

研究成果の概要(英文):In this study, it is examined what perceptions teachers and students in the Kingdom of Morocco and the Republic of Indonesia have on the use of multiple resources and the improvement of school libraries.　In the Kingdom of Morocco, interviews were conducted with educational administrators and/or elementary school teachers, in an Eastern city Oujda and in a Southern city Errachidia.　A female teacher under training and a female high school student of two Islamic boarding schools in Java, the Republic of Indonesia had cooperated to conduct an action research for about one year.　Gathering data in the researches, the researcher develops a model of development assistance for school libraries in developing countries.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	700.000	210,000	910,000
２０１１年度	1,700,000	510,000	2,210,000
２０１２年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：情報学、図書館情報学・人文社会情報学
キーワード：学校図書館、開発援助、モロッコ王国、インドネシア共和国、イスラーム教育、教材、読書指導、絵本

１．研究開始当初の背景

21 世紀のボーダーレス社会にあって、多元的な価値と文化への理解を子どもたちに促す異文化理解教育や国際理解教育、開発教育の必要が指摘されている。相互理解のため、同様の学習・教授は先進諸国のみならず、開

発途上国においても必要であろうが、開発途上国の側には情報資源とその整備に限界があろう。本研究では、そのような学習・教授において多様な資料を収集、整理、提供し、文化多元主義的価値観を体現する学校図書館が果たす役割を問い、ひいてはそのような学習・教授の意義を探究するべく、アクション・リサーチを開発途上国において実施することとした。

開発途上国の学校においては、情報資源とその整備については、他国からの援助が必要かもしれない。ただ、近年、20 世紀の開発援助の評価と問い直しがさまざまな分野で取り組まれている。例えば国際経済学の研究では、過去の開発援助について負の影響を指摘するものが散見される。近代の図書館の制度は、19 世紀半ばに主にアングロサクソンの文化において本格的に発展したものと考えるが、それが世界の各地にいかに伝播し普及したかのマクロな視野からの検証は容易ではなく、実証研究はほとんど行われていないと言ってよい。しかし、事実、近代の図書館の管理運営法、制度や理念は、文化・教育に関わる開発援助をとおすなどして、20 世紀に各地に伝えられてきた。本研究では、このような開発援助の問い直しの時期にあって、参加型開発の理念に基づく新たな図書館開発援助のあり方を、アクション・リサーチの手法によって同時に検討することとした。

２．研究の目的

本研究は、モロッコ王国の貧困農村地域において、多様な観点から書かれた資料の学習・教授への活用に対する教師および生徒の認識について明らかにすることを目的とし、そのような資料の整備・提供を行う学校図書館の開発援助モデルの提案を目指した。

３．研究の方法

近代の学校図書館研究の成果をふまえた問いかけ、働きかけを調査者側から行いながら、多様な資料の活用による多元的な価値と文化への理解を児童・生徒に促す学習・教授活動に対する、教諭と生徒の反応と認識の変化、またインドネシア共和国ではそれに加えて、試験的・探索的に実施してもらう学校図書館の改革に関わる取り組みを記録する。そしてその記録を、現地の調査協力者と調査者の相互交流を行いながら分析する。この一連のアクション・リサーチをとおして、開発途上国の教育における多様な資料の意義を問い、学校図書館開発援助モデルの開発を試みた。

ただ、2010 年度から 2012 年度までの 3 年間の間に、研究のスタート時点で調査実施地域としていたモロッコ王国での調査が困難になり、インドネシア共和国を調査地に加え、仮説モデルを改める判断をした。これは、調査の方法に大きな影響を与えたので、ここで説明をしておきたい。それは、研究計画執筆時に予定していた、モロッコ王国在住の日本人で、国際機関で教育の開発援助に従事する方からの協力が得られなくなり、現地の協力者を改めて探さなければならなくなったところに、アラブの春が起きたということであった。2010 年度から 2011 年度にまたがって、モロッコ王国で協力者を得るべく努力したが、一時、協力を約束してくれた現地の研究者も、具体的な調査実施のための準備をはじめたところで、本調査に政治的・思想的な難しさを感じたようすで、この連携関係で調査実施に至ることはなかった。図書館という場が、実は「ソフト・パワー」の攻防の場であることに、援助を受ける側は気づいていないわけではない。何か物資を受けとることはあっても、文化的な影響は受けたくない（子どもたちがそのような影響を受けることに加担したくない)、という態度は、モロッコ王国だけでなく、そのあと、調査協力者を得ることとなったインドネシア共和国の教育者にも、しばしば感じられた。以上のような困難を経験して、ちょうど 3 年にわたる助成期間の折り返しであった 2011 年度の秋に、モロッコ王国と同じイスラーム文化圏で、比較的民主化の進んでいるインドネシア共和国を本調査の代替地に定めた。

このようにアラブの春の余波の対応に苦慮した一方で、日本でも、2011 年に、3.11 を経験し、日本の言論空間の問題が明らかになって、多様な観点から書かれた資料を活用する教育とはいかなる力を育むもので、それは具体的にどのような内容であるべきかについて、より深い検討が不可欠であることが実感されるようになった。このため、2011 年度には、それを検討するための国内での調査も実施した。

結果として、本研究では、次にあげるような複数の調査および研究の方法を試行錯誤的に行うこととなった（実施順に示す)。また、現地の調査協力者の確保に時間がかかり、進行が遅れ、最終的に、調査報告書の発行は、2013 年度にもちこす決断をせざるを得なかった。

（2010 年度）文献調査；日本国内の関連分野の研究者からの専門的知識の供与；モロッコ王国ラバトを訪問しての調査準備

（2011 年度）日本国内で多様な資料の活用について学校図書館関係の教職員を対象とする連続公開講座と調査の実施；インドネシア共和国ジャワ島のイスラーム寄宿学校（プサントレン）3 校を訪問しての調査準備；モロッコ王国の貧困農村地域であるウジダ（Oujda）およびエルラシディア（Errachidia）を訪問しての調査準備；前述のインドネシア

共和国のプサントレンの見習い教師および高校生を対象とした調査のジャカルタでの実施

（2012 年度）2011 年度と同じインドネシア共和国のプサントレンの見習い教師および高校生を対象とした調査の東京での実施；調査のまとめに向けて日本国内の関連分野の研究者からの専門的知識の供与；モロッコ王国の学校図書館に関する政策提案の歴史文書の整理、翻訳

４．研究成果

（1）モロッコ王国に関する研究の成果

初年度の 2010 年度には、①モロッコ王国の教育と図書館の事情、②国際的な児童書出版・流通の現状についての理解を深めるため、文献調査を行うとともに、次の方たちからレクチャ（専門的知識の供与）を受けた。

- 佐藤健太郎氏（当時、早稲田大学イスラーム地域研究機構研究院准教授）
- 堀井優氏（同志社大学文学部准教授）
- 栗田明子氏（日本著作権輸出センター創業者）

2010 年 11 月下旬には、首都ラバトを訪問し、モロッコ王国のユネスコ事務所の関係者から紹介を受け、現地の日本大使館、独立行政法人国際協力機構（Japan International Cooperation Agency: JICA）事務所、情報大学（Ecole des Sciences de l'Information）を訪問し、本研究の趣旨の説明と、研究への協力の依頼をし、インフォーマルなインタビューを行った。このときにお目にかかったJICA 関係者の紹介で、2011 年度末、同国の貧困とされる 2 つの地方都市、東部の町ウジダと南部の町エルラシディアに、青年海外協力隊員を訪ねた。両地域で、現地の教育行政担当に案内をしていただき、ウジダでは公立小学校 3 校（Kadissia、Khalid Bin Walid、Rabia Adaouia）を訪問、エルラシディアでは公立小学校 3 校（Ibun Hazm、Ain Laati とその分校）と技術高校（Lycée technique）を訪問した。このとき出会った方たちには、調査の趣旨を説明し、調査協力校・協力者を探していることを伝えた。そして、翌 2012 年度にまたぐ形で本調査実施の可能性を探ったが、最終的にそれは断念した。ただ、このときの 2 地域合計 7 校の訪問で、モロッコ王国の貧困地域の公立学校の学校図書館の状況は一定程度把握することができ、また人的なつながりを得ることができたため、モロッコ国内の政情に今後、変化があれば、将来的には調査・研究のフィールドを提供してもらう等があり得るだろうと考えている。

また、このモロッコ王国訪問時に現地で入手した、過去にモロッコ王国政府が公にした学校図書館に関する政策提案文書を、翌 2012 年度にレバノン在住の翻訳者に依頼して、アラビア語から英語に翻訳した。これは最終報告書に収載して公開する。今回、翻訳をすることができた 2 文書のほかにも数点の資料を入手しているが、予算の都合から、そのすべてを翻訳することはかなわず、現在までのところ、入手した文書の総合的な検討はできていない。しかし、翻訳した 2 文書は特に、モロッコの学校図書館史においてひとつの重要なできごとであったと思われる内容が書かれていると判断しており、まず公開する。

これらの文書は、1998 年から 2007 年までの、人民勢力社会主義同盟（The Socialist Union of Popular Forces: USFP）が政権をとった時期のものと思われる。内容としては、国立読書観測所（今回の英訳では The National Reading Observatory とされている）の設立が提案されている。フランス共和国では 1996 年に「L'Observatoire National de la Lecture」が設立され、現在も活動しているようであり、この機関のフランスでの設立から学ぶかたちで、モロッコでも提案があったのではないかと推測される。

（2）インドネシア共和国に関する調査の成果

2011 年、アラブの春ののち、モロッコ王国での調査が困難であると判断した。そこで、同じイスラーム文化圏で、比較的民主化の進んでいるインドネシア共和国を調査の代替候補地に定め、同年 11 月、イスラーム寄宿学校 3 校（Pondok Pesantren Pabelan；Gontor Pusat（男子校）；Gontor Putri（女子校））を訪問し、予備的な調査を行い、仮説モデルを改め、本調査実施の準備を急ぎ進めた。このとき、変化に対して可能性を感じたことと、また女子教育との関係からも分析・検討ができるのではないかと考えたことから、Pabelan と Putri の 2 校に調査協力を依頼することとした。そして、調査の趣旨を伝え、次の条件にあてはまる人物の推薦を依頼した。

- 英語での意思疎通ができる（両校とも、英語、アラビア語のバイリンガル校のため、これは特別な条件ではなかった）
- 女性
- 敬虔なムスリム
- 海外経験が無い（今回の調査に協力する経験が与える影響が大きくなることを期待して）
- Putri からは若手の教師；Pabelan からは生徒（Pabelan は学校規模が小さく、英語のできる女性教師となると、外国経験の少なくない方しかおられなかったため）

そして各学校から推薦された、Pabelan の図書委員を務める女子高校生と Putri の女性見習い教師に出会い、このあと約 1 年間、本研

究のアクション・リサーチに協力してもらうことになった。

主な調査は、調査協力者に、学校図書館の充実のための活動に役立つと思われる経験を積んでもらうことを意図して、調査者と共に、次のスケジュールで行動してもらうことをとおして行った。その前後に、多様な資料の学習・教授への活用、近代的な学校図書館運営に対する問いかけ、働きかけを行い、調査協力者2名の反応を記録した。

2012年3月10日（土）	ジャカルタ着；大型書店Gramedia（ジャカルタ中心部のGrand Indonesiaショッピングモール内）訪問
2012年3月11日（日）	Islamic Book Fairを訪問
2012年3月12日（月）	在インドネシア日本国大使館にて日本訪問のためのビザを申請；ジャカルタから学校に戻る
2012年5月28日（月）	来日；午後に渋谷教育学園渋谷中学高等学校を訪問
2012年5月29日（火）	午前に東京学芸大学附属大泉小学校；午後に東京学芸大学附属国際中等教育学校を訪問
2012年5月30日（水）	休日
2012年5月31日（木）	国際子ども図書館を訪問
2012年6月1日（金）	東京都荒川区にて第一日暮里小学校、諏訪台中学校、峡田（はけた）小学校を訪問；荒川区教育委員会指導室学校図書館支援室を訪問
2012年6月2日（土）	離日

調査者がこの間、協力者との会話についてとってきた記録に基づいて、現時点までに認識している、今後の検討課題を整理する。

- 「科学」観と知の世界観の相違：彼女たちに対して図書館や教育の開発援助を行いたいと考えるときに重要と思われたのが、ひとつめに、彼女たち、特に見習い教師のHさんがしばしば「Islamic Science」と呼んだものと、当方が考えている近代科学が異なっているということであった。この、「科学」観と知の世界観の相違と、出版文化にそれがいかに反映され、学校図書館の知に反映されるか、されるべきかについては、イスラーム文化圏の学校に対する図書館開発援助にあたって、必須の検討課題であると考える。
- 異文化理解・国際理解教育のあり方：単純な興味という意味では、むしろ彼女たちの学校では重視されていないらしいもの、例えば地理、異文化理解や国際理解といったテーマの、写真を多く含んだ図書は、彼女たちは自らの学校の授業ですぐに使うとは考えられないと言いながらも、インドネシアではあまり見たことがなく、学校の図書館に贈られたら興味をもつ生徒はいるだろうというような反応であった。日本の学校図書館で、総合的な学習の時間や社会科の、特に国際理解をテーマとした児童・生徒の学習成果物が掲示されていると、二人はよく眺めていて、似たようなものを見たことは無いと述べた。そうしたテーマをもっとインドネシアの子どもたちも学ぶべきなのか、と考えたようであった。開発途上国における異文化理解、国際理解教育のあり方について、その主題の児童・生徒向けの出版の状況とあわせて、検討する必要がある。
- 「実用書」のニーズの取り扱い：彼女たちの学校では、手芸や家政に関する図書に関心をもつ女子が多く、高いニーズが見込まれることを二人は揃って述べると同時に、日本で訪問した学校図書館では、日本語という見知らぬ言語でも図や写真が多くてわかるような気がするということもあるのか、そうした図書は興味深そうに覗いていた。実用書へのニーズは、生活のすべてが校内にある全寮制の学校ということが影響しているのだろうか。もっとも、日本の学校図書館でも実用書へのニーズは少なくないであろうから、これは特徴的な反応ではなかったのかもしれない。
- フィクションの取り扱い：文学、ライトノベル、漫画等は、言語の壁があり、そのニーズの把握や妥当性の判断がもっとも困難であった。ライトノベルや漫画が人気であることは、2012年に研究代表者がプサントレンを訪問したときに、子どもたちの発言で明らかになっていた。しかしどのプサントレンでも、教師たちの反応はそれに対して肯定的にはみえず、中には「女性は小説を読むべきではない」と述べる男性管理職もいて、実用書、ライトノベルや漫画等は、学校図書館開発援助のコレクション形成においてひとつの重要な論点になると思われた。良書とは何かという問いは議論が尽きないが、その地の言語を知らないと、議論の手がかりすらないのだということが痛感された。言語の壁が有る中で、いかにこれらの資料の提供を支援するかを検討しなければならない。

(3) 日本国内での調査の成果

3.11 後、日本社会の言論、報道に対して違和感を表明する人は少なくなく、日本の言論空間の問題が明らかになってきた。そして、学校図書館では多様な資料を提供するだけでなく、それらの活用に関わって情報の評価をいかに子どもたちに教えるかについて、緊急に改めて検討し、その学びをすぐに行動に移す必要のあることが認識された。そこで、当初の研究計画にはなかったが、本研究の一環として、2011 年秋から冬にかけて、学校図書館関係の教職員に対してそのような学びのための機会を提供し、学びの実際を調査するべく、連続公開講座「情報を評価し、判断する力をいかに育むか」を、次のスケジュールと内容で、立教大学を会場として実施した。

- 第 1 回:「知性の自由」を求める教育 講師:中尾ハジメ氏(京都精華大学大学院人文学研究科・教授)
- 第 2 回 : メディアとメディアリテラシー論者と図書館:3.11 後の放射能「安全」報道をめぐって 講師:影浦 峡氏(東京大学大学院教育学研究科・教授)
- 第 3 回 : 読書の歴史から学ぶ・教える講師:和田敦彦氏(早稲田大学教育・総合科学学術院・教授)
- 第 4 回 : 情報リテラシーとシティズンシップ 講師:小玉重夫氏(東京大学大学院教育学研究科・教授)
- 第 5 回 : 第 4 回までの受講者代表を中心に総括的討論

この講義録をまとめ、立教大学司書課程の 2 名の専任教員の論考を加えて、2013 年 2 月には、記録集『情報を判断する力』を発行した。

連続公開講座には、毎回、約 30 名の参加者があった。この出席者の学びの記録を分析し、学校図書館における多様な資料の提供と教育活用に関わる現代の課題を整理している。

(4) 今後の研究課題 : 学校図書館開発援助モデルの探究

学校図書館開発援助のモデルの探究としては、インドネシア共和国のプサントレンに調査協力校、協力者を得ることとなり、最終的に見習い教師と生徒に調査協力を依頼した時、仮説モデルとして、次のようなことを考えていた。それは、若く、海外経験が無く、教授経験の多くない教師や、生徒の代表が他の文化での新鮮な経験をもち帰って、学校になんらかのポジティブな変化をもたらすというもので、そのようなモデルの妥当性を各種の記録から検討したいと考えていた。

しかしこのモデルで実際に調査を実施してみると、今回の調査協力はいわゆる留学経験を与えられたものと彼女たちには理解されたらしいことが、帰国後の協力者 2 名の様子から感じられてきた。そして、調査者は、若く、まだ責任ある立場にない見習い教師や生徒を連携の相手に選んでも、彼女たちは立場からして帰国後すぐに強い影響力を発揮することはできるはずもないのであり、日本での経験をもって学校に戻って、学校に、周囲になんらかの影響を及ぼすといっても、もともと限度があったのだという当たり前のことを認識することとなった。特に、若い調査協力者の変化は長期的にはかることが求められよう。このような、ある種の海外研修の機会の提供によって現地の人材を育成するという開発援助モデルは、その妥当性をいかに実証することができるかを考えなければならない。また、「ソフト・パワー」の攻防の場でもある図書館について、物資は受けとりたいが文化的な影響はなるべく受けたくないという、両国で出会った教師たちの考えは、本質的には変化をこばんでいるとも言え、そこに教育における開発援助の難しさがある。しかしこのような態度が固まる以前に潜在的かつ本質的なニーズを掘り起こすという意味で、若い人に視野を広げてもらう海外研修の意義は必ずある。

一方で、イスラーム文化圏に対する学校図書館開発援助モデルの探究に関わっては、前に (2) であげたような要素を検討することが課題である。インドネシア共和国のプサントレンとモロッコ王国の公立学校の共通点としては、コーランの教育があり、それの誦唱・暗唱の習得に多くの時間と労力がかかっていることがあって、このほかの学校内での学習・教育活動に、その学びの方法が大きな影響を与えているものと思われた。これが、学校図書館という以前に、多様な資料へのニーズが大きくない理由のひとつであると考えることは自然であろう。しかし、今回の調査で出会ったインドネシア共和国の教師の中に多様な資料への関心を示す人はいて、その教育活用に現在までのところ積極的ではないにしても、近代派のムスリムたちとは、このような開発援助についてさらなる対話の可能性が感じられた。一方で、モロッコ王国においては、同国の現在の王制が同国の社会、教育のあり方に与えている影響が大きいように思われた。このような外的要因を含めた、モデルの探究、仮説モデルの提案を行う必要性を認識している。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①中村百合子「科研費研究「多様な資料の活用に対する教諭の認識に関する研究」最終年

度報告」『St. Paul's Librarian』No.27, 2013, p.119-126（査読なし）

②中村百合子「科研費研究の進捗状況報告」『St. Paul's Librarian』No.26, 2012, p.69-73.（査読なし）

③中村百合子「図書紹介　影浦峡著『3.11後の放射能「安全」報道を読み解く―社会情報リテラシー実践講座』」『立教大学教育学科研究年報』第55号, 2011, p.101-102.（査読なし）

〔図書〕（計3件）
①中村百合子編『情報を判断する力』立教大学学校・社会教育講座司書課程, 2013, 104p.

②Lesley S. J. Farmer, Natalia Gendina, and Yuriko Nakamura ed. *Youth-Serving Libraries in Japan, Russia, and the United States,* Scarecrow Press, 2011, 372p.(p.3-22).

③渡辺武達, 山口功二, 野原仁編『メディア用語基本事典』世界思想社, 2011, 360p.（担当箇所：中村百合子「図書館の活用」p.53-57）

〔その他〕
研究代表者のブログ
http://d.hatena.ne.jp/to-yurikon/

６．研究組織
(1)研究代表者
中村　百合子（NAKAMURA YURIKO）
立教大学・文学部・准教授
研究者番号：80411057

(2)研究分担者　なし

(3)連携研究者　なし